

学位論文の要約

中国における校内研修としての
レッスン・スタディに関する社会学的研究

広島大学大学院教育学研究科

教育学習科学専攻 教育学分野

D181108 陳 雨

I. 論文題目

中国における校内研修としてのレッスン・スタディに関する社会学的研究

II. 論文構成

序章 問題の所在

第1章 レッスン・スタディをめぐる研究の射程

第1節 中国におけるレッスン・スタディに関する制度の変遷

第2節 中国における先行研究

第3節 日本における研究の動向

第2章 研究の枠組みと調査の概要

第1節 校内研修としてのレッスン・スタディ

第2節 研究の視点と枠組み

第3節 調査の概要

第3章 レッスン・スタディの実態

第1節 中国でレッスン・スタディはいかに捉えられているか

第2節 中国の現状

第3節 実施形態

第4節 自由記述から見た教員の認識

第5節 まとめ

第4章 受容の二元構造

第1節 教育格差の二元構造の現状

第2節 農村部と都市部の差異

第3節 重点校と非重点校の差異

第4節 まとめと考察

第5章 教員への影響

第1節 問題の所在

第2節 レッスン・スタディによる資質能力の向上

第3節 資質能力向上の差異

第4節 まとめと考察

第6章 教員の認識とその形成メカニズム

第1節 問題の所在

第2節 認識の概観

第3節 教職に対する意識・職場環境との関連

第4節 認識の規定要因

第5節 まとめと考察

終章 レッスン・スタディは中国でいかに広がっているか

第1節 結果の要約

第2節 考察

第3節 本研究の意義と課題

主要参考文献

Ⅲ. 論文要旨

序章 研究の目的

1999年にスティグラーらが発表した *The Teaching Gap* をきっかけに、日本の授業研究が世界から注目されるようになった(海外では「レッスン・スタディ」と翻訳されている)。現在、世界中の研究者と教育関係者がレッスン・スタディに高い関心を持っている。レッスン・スタディは教員の指導方法の改善や教員自身の成長、ひいては学校改革においても重要な意味を持つと考えられているとされる(吉崎ら 2019, 北川 2014)。

中国でも校内研修が教員の指導能力の向上、学校教育改革、および教育課程改革の深化を担うものとして期待され、50年代から推進されてきた。中国のレッスン・スタディは、校内研修の一つであり、校内で教科担当の教員が仲間内で授業を見せ合い・検討する機会が多い。現場では様々な形態があるが、本稿ではその共通した特徴をまとめ、教師が協働的に授業を計画・観察・分析することを中国でのレッスン・スタディとして捉えて分析を行う。近年、中国でカリキュラムの改革が進められるにともない、レッスン・スタディの意義が主張され、その活性化がさらに求められるようになった。その結果、レッスン・スタディの効果が評価される一方で、形式化、形骸化が批判されてもいる。

このような背景の下、レッスン・スタディに関する実態調査がさかんに行われてきた。こうした調査は、レッスン・スタディに存在する課題を明らかにすること、および、その改善策を検討することの2点に焦点化されてきた。まず、レッスン・スタディの課題に関する先行研究について検討しておこう。課題としては、レッスン・スタディ自体が抱える問題（王 2012, 胡ら 2014）、教員の問題（董 2016, 李 2019）、さらに支援システムの不十分さ（王 2010, 李 2019）の3点に分けられる。次に、このような問題点の指摘を受けて、レッスン・スタディの改善策として、主にその実施方法の改善（趙ら 2016）、教員による研究の共同体の形成（王 2017, 張ら 2012, 李 2019）、および、リーダーシップの強化（宋 2012）が指摘されてきた。

しかし、それらの研究は対象を教室内での授業実践のみに限定し、レッスン・スタディの改善に向け、活動の実施方法に存在する問題点を指摘するのが主要な関心であった。それゆえ、先行研究には、いまだに三つの課題が残されていると言える。第一に、方法論の限界として、レッスン・スタディに関する調査は表面的な段階にとどまり、実証的な分析が足りないことである。第二に、研究の限界としては、レッスン・スタディの広がりを検討する際、先行研究が対象にしてきたのは、実践の場だけに限られており、より広い視点での検討が足りないことである。第三に、視点の限界として、レッスン・スタディに対する批判的な視点の欠如がある。

以上を踏まえ、本研究では、四つの研究課題を設定した。第一に、中国におけるレッスン・スタディは具体的にどのように行われているか、その実態を概観する（第3章）。第二に、学校間・地域間のレッスン・スタディの広がり、また学校への影響を検討する（第4章）。第三に、実践者である教員のレッスン・スタディに対する意識を検討し、それが形成されるメカニズムを明らかにする（第5章、第6章）。第四に、マイナスの面を含めてレッスン・スタディがもたらす影響を検討する。以上、四つの課題に取り組むことで、レッスン・スタディを批判的に考察し、その変革に応用することが可能となろう。

第1章 レッスン・スタディをめぐる研究の射程

第1章では、まず、レッスン・スタディに関する制度の変遷を概観する。その後、レッスン・スタディに関する先行研究の限界を検討する。検討の結果、「教員の視点と地域・社会からレッスン・スタディを実証的に検討する研究の欠如」と「批判的な視点の不足」の二つの面で先行研究には課題が残されていることを指摘した。

具体的には、中国の先行研究は、活動の活性化、教員の成長、実態調査という三つの主題が存在することがわかった。なお、先行研究は、調査対象が限定されておらず、教員の視点が欠如しており、実証的な分析が不十分であると批判できる。日本の先行研究で主に「存在する課題」「実践を活性化させる方法」と「教員の成長プロセス」が検討されてきた。なお、先行研究では教員の視点の欠如（姫野 2011）と教室外の環境の検討が不十分（村瀬 2007）という二つの限界が指摘されている。

第2章 研究の枠組みと調査の概要

第2章では、分析の枠組みと調査の概要について整理した。

まず、研究の枠組みについて説明する。本研究は、社会学的なアプローチから、レッスン・スタディの実践の場という境界を乗り越え、それを取り巻く環境から、実証的、批判的に検討する。研究の枠組みとして、1) 社会背景や学校状況におけるレッスン・スタディの広がり、2) 教員の個人的な文脈におけるレッスン・スタディの広がりという大きく二つの側面から検討する。

次に、調査の概要について説明する。分析に用いるのは、2019年10月下旬から11月初旬にかけて、中国の西南部の初等中等教員を対象として行ったアンケート調査の結果である。アンケートは2,042名に配布し、有効回答者数は1,364名、有効回答率は67%であった。

第3章 レッスン・スタディの実態

第3章では、中国でレッスン・スタディが具体的にどのように行われているかを概観する。分析により、レッスン・スタディの実施状況にはばらつきがあり、教員の認識にも期待と批判が同時に存在していた。具体的な内容は、以下の通りである。

まずは、中国におけるレッスン・スタディの捉え方を明確にした。その形態を整理した結果、大きく「義務としての授業公開」「研究のための授業づくり」といった4種類の形態が含まれている。次に、レッスン・スタディの基本状況について、ほぼすべての学校で推進されているが、主要な形態、開催頻度、協議の時間といったことにはばらつきがあることが明らかとなった。さらに、レッスン・スタディの実施形態に関しては、「組織」「実施方法」「支援」といった面では充実していたが、行政主導、閉鎖性、形式化といった課題が存在することが明らかとなった。最後に、自由記述から教員の期待と不満を分析した。

このように、地域・学校によって広がり状況が異なり、教員によってその効果が異なると考えられる。それを検証するために、第4章から第6章までは、レッスン・スタディの偏りがどのように生じてきたか、教員に対する効果と教員の意識の違いはどのようなメカニズムで生じているのかを分析する。

第4章 二元構造による広がりの違い

本章では、学校の置かれた社会的文脈に着目し、レッスン・スタディの広がり状況を検討する。具体的には、農村部と都市部、重点校と非重点校といった地域と学校によるレッスン・スタディの実態の差を分析する。その比較検討を通して、レッスン・スタディの広がり、地域・学校による差が生じており、またその差異は教育の質の差を拡大させる可能性があることを指摘した。

分析の結果として、まず、地域の差から見れば、都市部と農村部では、レッスン・スタディを実施する組織の整備には差が生じていなかった。しかし、リーダーシップ、開催数、事前検討時間、研究的な授業の開催などは都市部で多いことがわかった。また、教員の認識と行動では、農村部の教員はレッスン・スタディの役割を肯定的に評価しているにもかかわらず、能動的に取り組んでいないことが明らかになった。一方、学校の差から見れば、

重点校と非重点校との間に、上記のリーダーシップ、開催数、事前検討時間、研究的な授業の開催だけではなく、組織の整備も、重点校の方が進んでいることが明らかとなった。また、重点校の教員は非重点校より自発的に参加していることもわかった。つまり、都市部・重点校は、農村部・非重点校より、レッスン・スタディに対して積極的であり、それを支持する整備も完備されており、従って教員のモチベーションも高くなるという好循環になっていることがわかる。

以上のことから、資源配分の少ない地域・学校では、レッスン・スタディの改革が表面的なレベルにとどまり、根本的な改善はまだ行われていないことがうかがえよう。また、レッスン・スタディの広がりにより、教育資源に恵まれた学校・地域の質が一層向上することで、教育の質の差が拡大する可能性があることも推測できる。

第5章 教員への影響

第4章は地域間格差と学校間格差というマクロな視点からレッスン・スタディの広がり
の差異を分析し、学校への影響を検討した。続いて、第5章と第6章は、教員の個人的な
文脈というミクロな視点から、教員の認識を明らかにした。要するに、現場でのレッスン・
スタディがどのような効果を持っているかという教員の具体的な認識と、レッスン・スタ
ディをどのように評価するかという一般的な認識を明らかにした。

第5章では、現場のレッスン・スタディの効果に対する教員の認識を検討する。具体的
に、レッスン・スタディを通してどのような能力を身に着けたか、どのような資質が向上
したかといった教員の認識の全体を分析する。また、それらの認識は、教員の個人的な文
脈によりどのような差異が存在するかを分析する。分析の結果として、レッスン・スタ
ディを通して向上した能力に対する教員の認識には偏りがあり、また、そういった認識は教
員の属性や役職に影響されることを指摘した。

第6章 教員の認識とその形成メカニズム

第6章では、教員の認識の特徴とその中からうかがえる教職に対する意識、個人の属性お
よび労働環境の与える影響について検討する。結果として、教員の期待とレッスン・スタ
ディの実態との間にギャップがあることが確認できた。また、教員の認識は、役職や給料
など学校との関わり、勤務環境に影響されることも明らかとなった。具体的な分析結果は、
以下の通りである。

第一に、教員のレッスン・スタディに対する期待と現実のレッスン・スタディの方法と
の間にギャップがあることが確認できた。

第二に、重回帰分析の結果、レッスン・スタディに対する評価は、教員の属性や勤務環
境が大きな影響を与えていた。具体的には、レッスン・スタディに対する肯定的な認識に
ついて、都市部の女性で教職に満足している者がレッスン・スタディを教員としての資質
向上に有効だと考えていることになる。また、若く、学校の管理的な仕事をし、教職に満
足している者がレッスン・スタディの活動で充実感を得ていることになる。一方、レッス
ン・スタディに対する否定的な認識については、男性で校務分掌が無く、仕事に満足でき

ず、意欲が低く、さらに、教員としての教育行為が負担だと感じている者がレッスン・スタディの効果を否定的に捉えていることになる。仕事に満足できず、意欲が低い者がレッスン・スタディの方法に対し、批判的であることになる。

終章 レッスン・スタディは中国でどう広がっているか

以上、レッスン・スタディが中国でどのように広がっているかを実証的に分析してきた。終章では、本研究の議論を総括し、主要な知見と本研究の意義、今後の課題について述べた。

まずは、本研究の結果は3点にまとめられた。第一に、レッスン・スタディの形態を四つにまとめた上、開催頻度、協議の時間、組織、実施方法、内外の支援といった現状を明らかにした。第二に、マクロな視点で、レッスン・スタディの広がりの実態の地域間・学校間の差異を検証した。レッスン・スタディは経済的に有利な都市部と重点校においてより発展していることが明らかとなった。第三に、ミクロな視点で、教員に焦点を当て、レッスン・スタディに対する教員の認識を明らかにした。教員がレッスン・スタディに対する評価は、個人の属性、学校との関わりに影響されることを確認した。

以上の結果を踏まえ、主に以下の4点から考察を行った。一点目は、不利な状況に置かれた地域・学校でのレッスン・スタディ改革の形骸化である。二点目は、レッスン・スタディが地域間・学校間の差異を拡大させる可能性があることである。三点目は、非重点校はさておき、農村部のレッスン・スタディの改革では、少なくとも短期的・長期的な課題と解決策が具体的に明示される必要がある。四点目は、レッスン・スタディを改革する際、当事者、あるいは実践者である教員個人の視点を重視する必要があることである。

以上の知見を踏まえ、本研究の意義は大きく以下の三点にまとめられる。第一の意義は、レッスン・スタディをめぐる広がり状況と教員の認識を対象とする実証的・方法論的視座を提示したことである。第二に、社会学的な視点から考察することで、客観的な立場からレッスン・スタディを捉え直すことができた。つまり、ポジティブだけではなく、ネガティブな視点からも、レッスン・スタディの影響と課題を指摘した。第三に、実践に具体的な改善策を提示したことである。

最後に、本研究の限界、および、今後の課題を挙げておきたい。本研究の限界としては、サンプルが主に経済的な面で不利な中国の西南部で得られたものであることが指摘できよう。今後の課題としては、教員のレッスン・スタディへの認識の規定要因のうち、今回の分析で着目しなかった要因、例えば学校の雰囲気や、リーダーシップなどについても検討すべきだと考えられる。また、集団内の類似性を考慮し、今後は個人レベルの変量だけではなく、組織レベルの変量を用いた階層線形モデルなど、新たな手法による分析も必要であろう。

IV. 主要参考文献

和文献

- 安彦忠彦, 1983, 『現代授業研究の批判と展望』 明治図書。
- 秋田喜代美・キャサリンルイス, 2008, 『授業の研究 教師の学習——レッスン・スタディへのいざない』 明石書店。
- 藤井泰・山田浩之, 2009, 『地域社会における教師の仕事と生活』 松山大学総合研究所。
- 長谷川哲也, 2011, 「教職課程の教育効果をめぐる評価：現職教員の認識に注目して」『高等教育研究』第14集, pp. 185 - 205.
- 姫野完治, 2011, 「校内授業研究及び事後検討会に対する現職教師の意識」『日本教育工学会研究報告集』第11巻第3号, pp. 47-50.
- 姫野完治, 2012, 「校内授業研究を推進する学校組織と教師文化に関する研究(1)」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第34号, pp. 157-167.
- 稲垣忠彦・佐藤学, 1996, 『授業研究入門』 岩波書店, pp. 144-145.
- 稲垣忠彦・久富善之編, 1994, 『日本の教師文化』 東京大学出版会。
- 伊勢本大・山田浩之・周正, 2017, 「教員免許更新制に教員は何を求めるのか」『教育学研究紀要 (CD-ROM版)』第63巻, pp. 314 - 323.
- 伊藤功一, 1990, 『教師が変わる授業が変わる校内研修』 国土社。
- 梶田叡一, 1995, 『授業研究の新しい展望』 明治図書。
- 木原俊行, 2004, 『授業研究と教師の成長』 日本文教出版。
- 木原俊行, 2006, 『教師が磨き合う「学校研究」授業力量の向上をめざして』 ぎょうせい。
- 北神正行・佐野享子・木原俊行, 2010, 『学校改善と校内研修の設計』 学文社。
- 北川佳子, 2014, 「校内授業研究で育まれる教師の専門性とは」 日本教育方法学会編, 『授業研究と校内研修』 図書文化, pp. 22-35.
- 的場正美・柴田好章, 2013, 『授業研究と授業の創造』 溪水社。
- 村瀬公胤, 2007, 「授業研究の現在」『教育学研究』第74巻第1号, pp. 41-48.
- 日本教育方法学会編, 2009, 『日本の授業研究〈上〉授業研究の歴史と教師教育』 学文社
- 日本教育方法学会編, 2009, 『日本の授業研究〈下〉授業研究の方法と形態』 学文社。
- 日本教育方法学会編, 2014, 『授業研究と校内研修』 図書文化。
- 小柳和喜雄・柴田好章, 2017 『Lesson Study』 ミネルヴァ書房, pp. 2-18.
- 鹿毛雅治・藤本和久編, 2017, 『「授業研究」を作る』 教育出版。
- 宇佐美寛, 2005, 『授業研究の病理』 東信堂。
- 横須賀薫編, 1990, 『授業研究用語辞典』 教育出版。
- 吉崎静夫・村川雅弘・木原俊行, 2019, 『授業研究のフロンティア』 ミネルヴァ書房, pp. 2-15.
- 油布佐和子編, 1999, 『教師の現在・教職の未来 あすの教師像を模索する』 教育出版, pp. 32-50.

中国語文献

- 丁岡・陳蓮俊・孫玫璐, 2011, 「中国中小學教師專業發展狀況調查於政策分析報告」『教育研究』32 (03), pp. 3-12.
- 董曉榮, 2016, 「改善中小學教研活動的策略」『基礎教育研究』(05) pp. 31-34.
- 胡方・熊知深・傅瑜, 2014, 「中小學校本教研實施現狀調查」『上海教育評估』3(01), pp. 45-51.
- 韓江萍, 2007, 「校本教研制度：現狀於趨勢」『教育研究』(07), pp. 89-93.
- 賈霞萍, 2015, 「中小學校本教研實施現狀調研報告」『教育理論於實踐』35 (32), pp. 31-34.
- 李敏, 2015, 「中學教師工作投入感研究」華東師範大學博士論文。
- 李衛霞, 2019, 「走向專業自主的教研組變革研究」華東師範大學博士論文。
- 潘湧, 2008, 「教研員職能轉變於使用機制改革」『教育發展研究』(Z4), pp. 17-20.
- 宋萑, 2012, 「論中國教研員專業領導者的新角色理論建構」『教師教育研究』24 (01), pp. 18-24.
- 王榮生, 2012, 「課例研究：本土經驗と及多種形態」『教育發展研究』32 (08), pp. 31-36.
- 王海林, 2010, 「校本教研對教師專業發展的影響情況調查報告」『基礎教育』7 (09), pp. 55-58.
- 王英豪, 2017, 「基於教育疲勞現象的校本教研突破」『中國教育學刊』2017 (04), pp. 102.
- 張增田・彭壽清, 2012, 「論教師共同體的三重意蘊」『教育研究』33 (11), pp. 93-97.
- 趙德成, 2014, 「教師成為研究者：基於課例研究的分析」『教師教育研究』26 (1), pp. 75-80.
- 趙敏・藺海丰, 2016, 「校本教研共同體建構：從共存走向共正」『教育研究』37 (12), pp. 112-119.

洋文献

- Goodson, I.F., 2001, *Life Histories of Teachers*. (藤井泰・山田浩之編訳, 2006, 『教師のライフヒストリー』晃洋書房。)
- Huang, R., Fang, Y. and Chen, X., 2017, “Chinese Lesson Study: a Deliberate Practice, a Research Methodology, and an Improvement Science. *International Journal for Lesson and Learning Studies*, 6, pp. 270-282.
- Stigler, J.W. and Hiebert, J., 1999, *The Teaching Gap: Best Ideas from the World's Teachers for Improving Education in the Classroom*, The Free Press.
- Xu, H. and Pedder, D., 2014, “Lesson Study. An International Review of the Research,” In Dudley, p. (Ed.) *Lesson Study. Professional Learning for Our Time*, London & New York: Routledge, pp. 29-58.